

大人が絵本を 第35回 絵本に



司書・読書アドバイザー 安藤 宣子*

小児歯科医師 濱野 良彦**

* 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)
** 医療法人元気が湧く 理事ファウンダー

「^ゆ行きて帰りし物語」の裏には

日常の世界から非日常の世界へ行って帰る「^ゆ行きて帰りし物語」を読み解いていると、もうひとつの視点に気がきます。『ヘンゼルとグレーテル』は、継母に捨てられて非日常の世界に行きましたし、『かいじゅうたちのいるところ』のマックスは、お母さんに怒られて異界へ行きました。また、みいちゃんは、お母さんの優しいまなざしに見送られて『はじめてのおつかい』に行き、笑顔のお母さんに迎えられて帰ってきました。桃太郎は、お母さん代わりのおばあさんにきびだんごを作ってもらい、鬼が島へ送り出してもらいました。

そうです。冒険への旅立ちには、母親の存在があるのです。けれど、その描かれ方は様々で、温かく見守り続ける『はじめてのおつかい』のお母さんがいれば、『かいじゅうたちのいるところ』のように姿を全く見せないけれど、怒った後には温かい食事を準備し、安心を与えるような、子どもとの距離感を絶妙に保つお母さんもいますし、ヘンゼルとグレーテルの怖い継母という位置づけもあります。良い母子関係にしろ、不穏な母親にしろ、いずれも母親という存在があって冒険へ行き、そこで成長を遂げているのです。

みいちゃんとマックスのお母さんは、子どもの成長に必要な冒険や、ペナルティを取って与えて、そ



カトリーン・ブランド 絵
藤本朝巳 訳

『ヘンゼルとグレーテル』(平凡社)



れを乗り越えたときに子どもたちは心の成長を遂げる構図がみえてきます。

大人のための絵本です

ヘンゼルとグレーテルの継母という存在は、子どもの成長に良い影響があるのでしょうか。一見したら、虐待のようにも受け止められる両親の行動ですが、松居直氏の子息である友氏は、「子どもを親もとから引き離し、未知の世界に放り込み、自分たちの力で生きていけるように仕向けていくことが、子どもの自立に必要なだと物語は教えています」と述べています¹⁾。少々、乱暴な解釈にも感じますが、本連載第14回の「情緒を穏やかにする絵本」で本書を紹介した際、怖い物語世界であっても、お母さんと一緒に読みあうことで、守られている安心感をもって乗り越えたとき、それが子どもの勇気となり、豊かな情緒となって育まれることをお話しました。子どもの自立への一歩で、この体験の繰り返しが生きる力として備わり、やがて一人で未知の世界へ行って帰ることができるようになるのです。また友氏は、2人の捨てられた森というのは無意識の世界に通じるとし、森に住んでいる魔女は、子どもを飲みこみ、自立を妨げようとする力の象徴で、母親の否定的な力のイメージ化であると示しています¹⁾。

昔話研究では、魔女は母親の二面性を表しているとして解釈されています。魔女は、はじめヘンゼルたちに優しく語りかけ、空腹の欲求を満たし、寝かしつけるのですが、この行為こそ、「母性の根本的な衝動」¹⁾と友氏は表現しています。母親が赤ちゃんに優しく語りかけ、泣くと母乳を飲ませて欲求を満たして寝かせてあげるのは、親に課せられた育児の任務です。しかし、これには続きがあって、「この母性

手にするときは！

学ぶ母親像

企画 濱野 良彦

構成 木須 信生 ※※※

※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)

の衝動は愛の力なのですが、子どもが少年期に入っても同じ接し方をしていたのでは、子どもの健全な成長を妨げる無意識の利己的な欲求でしかない」と論じ、子どもから自立する力を奪い、自分好みに合わせた味付けをして食べようとする魔女は、過保護・過干渉への警鐘的な描かれ方がされていると説いています¹⁾。

魔女の姿は、子どもの成長過程で揺れる母親の内面でもあるのでしょうか。さて、大人が絵本を読むとき、母親の立場で、子育ての視点から母としてのあり様を俯瞰しながら読むと、お母様方へ何らかのヒントになることもあるのではないのでしょうか。同一の物語を、子どもが読んだときと大人が読んだときとは、異なる視点でそれぞれの発達課題の支援とってくれる絵本を読み解いてみましょう。

母性本能のチカラ

子育てにおいて、母は「良い母親」であり、「悪い母親」でもあるでしょう。マックスのように、いたずらが過ぎてしまえば、夕食抜きで寝室に入らせるという、しつけの範疇を逸脱したかのようなお仕置きを与えてしまうことも、ときにあるかもしれません。しかし、子どものやりたい放題、野放図では子育てとか養育とは言えません。母性本能の神話性を18世紀以来の育児事情の変遷により検証したバダンテールは、「真のしつけ、それを与えるべきなのは母親である。しつけは教育よりも意味が広い」とし、「しつけは何よりも道徳的価値を教え込むことであり、一方、教育は知的形成を目的とする」と論じています²⁾。さらに「母性本能が、母親の中に、献身、忍耐、限りない愛、道徳教育にとって必要にして十分な諸条件を生じさせる」と言及しています²⁾。善

悪の判別を教え、悪いことをすれば叱り、諭すことも親の大事な務めです。この見方をすると、マックスに自分がとった行動について考える時間を与えてから、温かい夕御飯を出したお母さんに「献身、忍耐、限りない愛、道徳教育」をそのままみることができます。それと同時に、読者としてホッとします。母親としてのアメとムチの使い分けを示してくれているようです。

母子関係と距離

母と子の距離感が絶妙な『ぼくにげちゃうよ』は、子うさぎが母うさぎに「ぼくにげちゃうよ」と言うのですが、母は「追いかけますよ」と言い返します。子うさぎが魚になったり、山の岩になったりして「にげちゃうよ」を繰り返すたび、母うさぎは子に對抗するものに扮して「つかまえちゃう」を重ね、言葉と空想のやりとりだけで、結局、「子うさぎはどこにもでかけませんでした」。これこそ、冒険に行って、母親のもとに帰ってくるごっこ遊びのようです。母の優しいまなざしのもとに出かけ、母のもとに帰ってくるのです。子ウサギは、母の愛を確かめるかのように、あの手この手で「にげちゃうよ」を繰り返し、母うさぎがそれに応答する追いかけっこにみえます。

母子間の愛情が表現されていて、ほのぼのとしたお話ですが、松井るり子氏は「こんなしつこいお母さんを持ったら息が詰まる」「愛情深い母うさぎに、



『ぼくにげちゃうよ』
マーガレット・ワイズ・ブラウン 作
クレメント・ハード 絵 岩田みみ 訳
(ほるぷ出版)





自分の中の子どもを追いつめる執着に、気付かされた」との見方をしています。なおも、子どもを決して逃がすまいとするお母さんを『牛方と山姥』の山姥みたいだと、なかなかユニークな例えをしています³⁾。やさしい母親となるか、山姥となるかは、子どもの成長・発達によって異なってくるでしょう。やがて反抗期という成長過程がやってきたとき、子ども目線では山姥に映る時期もあるかもしれません。母が親として、常に子どもの成長に応じた距離の取り方を考え続けていけばよいのだと思います。

絵本の中の母と子の関係を様々な角度から観察すると、母である自分と子どもの関係や、母親のあり方を冷静に見つめなおすことができることを松井氏は示しているのでしょう。

母なるもの、それは…

松井氏が母親の例えで表現した山姥といえば、日本の昔話に登場する女の鬼で、例にあげられた『牛方と山姥』では、食べ物も牛もまるまる飲み込んで牛方までも食べようと追いかけます。『三枚のお札』の山姥は、山中で出会った小僧さんを食らおうと追いかけるし『食わず女房』では頭の後ろの口から飯をたいらげると、次には男を食べようとして、いずれも人々を食らうがためにしつこく追いかけるのです。

多様な類話のある山姥ですが、歴史ある昔話研究では西洋の自我意識の理論に照らし、太母(グレートマザー)のイメージと論じられています⁴⁾。魔女の母性的な優しさの反面、子どもの自立を妨げようとする行為を「西洋型の母性の否定的な力」と述べた松居友氏は、鬼婆(山姥)を日本型の母性の代表として、世の東西を越えて母親の息子によせる思いは、ほとんど同じであると解説しています⁵⁾。子どもの「萌芽としての弱い自我を世界が養い育てる母として映るか、あるいは、出現し始めた自我を呑みこみ、もとの混沌へと逆行せしめる恐ろしい母として映るか」、それに従って太母(グレートマザー)の

像は、肯定的あるいは否定的の二面性が表出されるというのです⁶⁾。

山姥も魔女と同じく、優しい言葉をかけ、おいしい食べ物を与え、安心して寝かせてあげます。そう、『三枚のお札』の小僧さんが山中で優しく家に招き入れられ、お腹を満たしてもらい、眠ってしまったようにです。魔女と山姥は共通して、子どもを優しく包み込み安心感を与える一面をもつ一方で、執拗に追いかけて食べようとする姿をみせます。母親は、わが子をひたむきに愛し、可愛がって養育するものです。次第に成長していく子どもに対して、その愛情表現がいつまでも同じであっては、押しつぶされてしまう子もいるかもしれません。山姥の「食らおうとする」行為は、母親との一体感に取り込まれて、成長を止められてしまうという暗示があります。だからこそ、成長に応じ、母親のもとを離れて「行って帰る」冒険が必要というわけです。その繰り返しを重ねて成長し、やがて自立していくのです。ちなみに、この太母(グレートマザー)は、母そのものでなく、「母なるもの」とした無意識の概念で、誰もが根源的に持っているものだとされています⁴⁾。そうすると、魔女や山姥のような二面性をもった心理行動は、何も母親に限ったものではなく、父親であっても、保育者の立場にあるすべての大人が持っているということではないでしょうか。



『さんまのおふだ』
千葉幹夫 著
早川純子 絵(小学館)



育児は育自

21世紀ではナンセンスとなった「真のしつけをあたえるべきなのは母親」とかつて説いたバダンテールは、「母性愛は、女にとって、たんに子どもに乳を

あたえることにあるのではなく、何よりもその子を立派に育てることにある」と論じています²⁾。「母性愛は本能などではなく、母親と子どもの日常的なふれあいの中で育まれる愛情」²⁾です。子どもに対する養護的な我慢や愛着の形成は生まれ持ったものではなく、母親本人の生育過程で形成されるもので、その人の発達過程すべてがかかわっていると考えられています。悩んで迷って落ち込んで、時に我慢したり、観察したり、だから得られる喜びや幸せがあり、そうして深い愛を注いで、個々人の「母性」が作り上げられていくものです。

「育児」は「育自」とも言います。最初から完ぺきな母親なんて存在しないということです。子どもの成長とともに、母性が形成されていくのです。こんなお話をするだけでも、肩の力を抜けるお母様は大勢いるでしょう。

母性の形成をスマホに阻害されませんように

このようにして形成されていく母性愛ですが、現代社会の利器によって危惧されることがあります。シンガポールの小学生の作文が元になった絵本『ママのスマホになりたい』は、子どもからお母さんへの叫びです。声をかけてもスマホに夢中になっているママ、「テレビのCMが始まるとスマホを見て、テレビが始まるとテレビを見て、赤ちゃんが泣いたら赤ちゃんを見て、いつになったら僕を見てくれるの」⁷⁾という悲しい気持ちが絵本のタイトルそのままです。

皆様の歯科医院待合室では、親子が並んで診療待ちをしているのに、お母様はスマホ、お子様はゲームに没頭し、会話がみられないといったような光景はありませんか。ビブリオキッズでは、お子様が絵本を一人で読んでいる横でスマホをしているお母様や、授乳中にスマホを扱っているお母様もしばしばみられます。その一瞬もお子様を見つめると、「顔つきが変わってきたな」とか、「今、笑ったの?」とか、小さな成長を確認し、そしてわが子をますます愛お

しく思ったり、ぎゅーっと抱きしめてみたりとの感情が生まれてくるものです。

そうやって形成されていく母性愛育成の機会を、スマホによって奪われていませんか。子育ての悩みをSNSで誰かに聞いてもらい、育児ストレスを払拭できる誰かにつながっているという安心を持てるアイテムではありますが、果たして今、本当につながっていなければならないのは誰かを、現代の若いお母様方に今一度、問い直してもらいたいと思います。かわいいわが子の成長を見られるのは「今」だけです。一日一日が日々の成長で、それは本当に「今日」だけのことです。昭和時代とは異なる育児環境下にいるお母様方へ、母性の形成を支援することも、小児を対象とする医療機関の役割のひとつだと考えます。

絵本は、大人のためのものでもあるのです。

文献

- 1) 松居友：昔話とところの自立，宝島社，東京，1994，pp.71-96.
- 2) エリザベート・バダンテール著，鈴木晶 訳：母性という神話（ちくま学芸文庫），筑摩書房，東京，1998，pp.311-316.
- 3) 松井るり子：ごたごた絵本箱，学陽書房，東京，1990，pp.200-204.
- 4) 河合隼雄：昔話と日本人の心，岩波書店，東京，1982，pp.49-55.
- 5) 松居友：昔話とところの自立，宝島社，東京，1994，pp.97-113.
- 6) 河合隼雄：昔話と日本人の心，岩波書店，1982，pp.19-26.
- 7) のぶみ：ママのスマホになりたい，WAVE出版，東京，2016.

絵本

- 1) カトリーン・ブランド 絵，藤本朝巳 訳：ヘンゼルとグレーテル〜グリム兄弟の童話から，平凡社，東京，2010
- 2) モーリス・センダック作，神宮輝夫 訳：かいじゅうたちのいるところ，富山房，東京，1975.
- 3) 筒井頼子 文，林明子 絵：はじめてのおつかい，福音館書店，東京，1976.
- 4) マーガレット・W・ブラウン文，クレメント・ハード 絵，岩田みみ 訳：ほくにげちゃうよ，ほるぷ出版，東京，1976.
- 5) 千葉幹夫 文，早川純子 絵：さんまいのおふだ，小学館，東京，2010.